

9.3

第10回読響メトロポリタン・シリーズ
〈水〉東京芸術劇場コンサートホール／19時開演

The 10th Yomikyo Metropolitan Series
Wednesday, 3rd September, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 **コルネリウス・マイスター** 6ページ

Conductor **CORNELIUS MEISTER**

ピアノ **アリス＝紗良・オット** 8ページ

Piano **ALICE SARA OTT**

コンサートマスター 萩原尚子 (ゲスト)

Guest Concertmaster **NAOKO OGIHARA**

ベートーヴェン **ピアノ協奏曲 第1番** ハ長調 作品15 [約36分] 11ページ

BEETHOVEN / Piano Concerto No. 1 in C major, op. 15
I . Allegro con brio
II . Largo
III . Rondo. Allegro scherzando

[休憩 **Intermission**]

R. シュトラウス **アルプス交響曲** 作品64 [約47分] 12ページ

R. STRAUSS / Eine Alpensinfonie, op. 64
夜－日の出－登り道－森への立ち入り－小川に沿って歩く
－滝－幻影－花咲く牧場－山の牧場－林で道に迷う
－氷河－危険な瞬間－頂上にて－幻－霧が立ちのぼる
－日はしだいにかげる－哀歌－嵐の前の静けさ－雷雨と嵐、下山
－日没－終結－夜

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[事業提携] 東京芸術劇場
※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

9.9

第540回 定期演奏会
〈火〉サントリーホール／19時開演

The 540th Subscription Concert
Tuesday, 9th September, 19:00 / Suntory Hall

指揮 **下野竜也** (首席客演指揮者) 7ページ

Conductor **TATSUYA SHIMONO** (Principal Guest Conductor)

コンサートマスター 小森谷巧

Concertmaster **TAKUMI KOMORIYA**

ハイドン **交響曲 第9番** ハ長調 Hob. I-9 [約12分] 14ページ

HAYDN / Symphony No. 9 in C major, Hob. I-9
I . Allegro molto
II . Andante
III . Menuetto. Allegretto

[休憩 **Intermission**]

ブルックナー **交響曲 第9番** ニ短調 WAB. 109 [約63分] 15ページ

BRUCKNER / Symphony No. 9 in D minor, WAB. 109
I . Feierlich, misterioso
II . Scherzo
III . Adagio

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業)
[協力] **アフラック** (アメリカンファミリー生命保険会社)

9.16

第574回サントリーホール名曲シリーズ
〈火〉サントリーホール／19時開演

The 574th Suntory Hall Popular Series
Tuesday, 16th September, 19:00 / Suntory Hall

指揮 下野竜也 (首席客演指揮者) [7ページ](#)
Conductor TATSUYA SHIMONO (Principal Guest Conductor)

ピアノ 小川典子 [8ページ](#)
Piano NORIKO OGAWA

合唱 上野学園大学合唱団 [9ページ](#)
Chorus UENO GAKUEN UNIVERSITY CHORUS

コンサートマスター ダニエル・ゲーデ
Concertmaster DANIEL GAEDE

松村禎三 ゲッセマネの夜に [約14分] [17ページ](#)
TEIZO MATSUMURA / To the Night of Gethsemane

モーツァルト ピアノ協奏曲 第24番 ハ短調 K. 491 [約31分] [18ページ](#)
MOZART / Piano Concerto No. 24 in C minor, K. 491
I. Allegro
II. Larghetto
III. Allegretto

[休憩 Intermission]

J. S. バッハ(ストコフスキー編) ゲッセマネのわが主よ BWV487 [約6分] [19ページ](#)
J. S. BACH (arr. Stokowski) / Mein Jesu (Geistliches Lied from Schemelli's Gesang-Buch), BWV487

カレル・フサ この地球を神と崇める (管弦楽版日本初演) [約26分] [20ページ](#)
KAREL HUSA / Apotheosis of this Earth
I. Apotheosis
II. Tragedy of Destruction
III. Postscript

※指揮者・下野竜也氏の意向により、
バッハとフサの両作品は続けて演奏されます。

【主催】読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
【助成】文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）、公益財団法人アフィニス文化財団 

9.20

第169回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
〈土〉東京芸術劇場コンサートホール／14時開演

The 169th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series
Saturday, 20th September, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

9.21

第74回みなとみらいホリデー名曲シリーズ
〈日〉横浜みなとみらいホール／14時開演

The 74th Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series
Sunday, 21st September, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮 下野竜也 (首席客演指揮者) [7ページ](#)
Conductor TATSUYA SHIMONO (Principal Guest Conductor)

オルガン 小林英之 [9ページ](#)
Organ HIDEYUKI KOBAYASHI

ティンパニ 岡田全弘 (読響・首席ティンパニ奏者) [10ページ](#)
Timpani MASAHIRO OKADA (YNSO Principal Timpani)

コンサートマスター ダニエル・ゲーデ
Concertmaster DANIEL GAEDE

J. S. バッハ(ストコフスキー編) トッカータとフーガ BWV565 [約9分] [21ページ](#)
J. S. BACH (arr. Stokowski) / Toccata and Fugue, BWV565

プーランク オルガン、弦楽とティンパニのための協奏曲 ト短調 [約22分] [22ページ](#)
POULENC / Concerto for Organ, Timpani and Strings in G minor
I. Andante – Allegro giocoso
II. Andante moderato
III. Tempo allegro – Molto agitato – Lento – Allegro – Largo

[休憩 Intermission]

サン＝サーンス 交響曲 第3番 ハ短調 作品78 〈オルガン付き〉 [約36分] [23ページ](#)
SAINT-SAËNS / Symphony No. 3 in C minor, op. 78 “Organ”
I. Adagio – Allegro moderato – Poco adagio
II. Scherzo. Allegro moderato – Presto – Maestoso – Allegro

【主催】読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
【助成】文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
【協力】横浜みなとみらいホール（9/21）
【事業提携】東京芸術劇場（9/20）

ドイツが生んだ若き天才
待望の読響初登場

コルネリウス・マイスター

Cornelius Meister

◇ 9月3日 読響メトロポリタン・シリーズ



©Nancy Horowitz

音楽の都ウィーンや世界的なオペラ・ハウスに旋風を巻き起こし、世界中から注目を浴びているドイツの若手指揮者。

1980年、ドイツ・ハノーファー生まれ。ハノーファー大学でピアノと指揮をコンラッド・マイスター、マルティン・ブラウス、大植英次氏らに学び、ザルツブルク・モーツァルテウム大学でデニス・ラッセル・デイヴィス、ホルヘ・ロッター、カール・カンパーに師事した。わずか21歳でハンブルク国立歌劇場にデビューを果たし、2005年には24歳でドイツ最年少の音楽総監督としてハイデルベルク市立劇場に着任し、12年まで7年にわたって務めた。10年からウィーン放送響の首席指揮者兼芸術監督を務めており、ムジークフェライン（楽友協会）やコンツェルトハウスなどでのコンサートをはじめ、日本も含む世界各地へのツアーやレコーディングなど、積極的な活動が高く評価されている。

これまでにロイヤル・コンサートヘボウ管、バイエルン放送響、ベルリン・ドイツ響、北ドイツ放送響、バーミンガム市響、パリ管、チューリヒ・トーンハレ管、スウェーデン放送響、デンマーク国立響、ヘルシンキ・フィル、ワシントン・ナショナル響、ボルティモア響などと共演。オペラの分野ではウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、コペンハーゲン王立劇場、ラトヴィア国立歌劇場（〈ニーベルングの指環〉を指揮）、サンフランシスコ・オペラなどに登場。我が国の新国立劇場では06年に〈フィデリオ〉を指揮した。15年にはミラノ・スカラ座へのデビューが決定している。

読響とは今回が初共演。

古典と現代、西洋と東洋
時空を超える音楽のメッセージ

下野竜也

Tatsuya Shimono

◇ 9月9日 定期演奏会
◇ 9月16日 サントリーホール名曲シリーズ
◇ 9月20日 東京芸術劇場マチネーシリーズ
◇ 9月21日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©読響（撮影：青柳聡）

2006年11月から13年3月まで読響の初代正指揮者を務め、現在は首席客演指揮者。古典から現代までの幅広いレパートリーを縦横に組み合わせた独自のプログラミングは常に話題を呼んでいる。邦人作品への造詣も深い。

1969年鹿児島生まれ。鹿児島大学教育学部音楽科、桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室、イタリア・シエナのキジアーナ音楽院で学んだ後、大阪フィルの指揮研究員となり朝比奈隆氏ら巨匠たちの薫陶を受けた。文化庁派遣芸術家在外研修員としてウィーン国立演劇音楽大学に留学中、2000年の東京国際音楽コンクールと01年のブザンソン国際指揮者コンクールで優勝を飾った。

国内の主要オーケストラはもとより、チェコ・フィル、シュトゥットガルト放送響、ローマ・サンタチェチーリア管、ミラノ・ヴェルディ響、ストラスブル・フィル、ウィーン室内管、南西ドイツ・フィル、カンヌPACA管、プラハ・フィルハーモニア、シリコンバレー響などと共演し、国際的な活躍を展開している。また、サイトウ・キネン・フェスティバル松本、アフィニス音楽祭、霧島国際音楽祭、宮崎国際音楽祭、別府アルゲリッチ音楽祭など、各地の音楽祭にも招かれている。学校コンサート、親子コンサートなどの教育プログラム、ジュニアオーケストラの指揮、指揮マスタークラスなど、後進の指導・育成にも熱意をもって取り組んでおり、その活動は多岐にわたる。

上野学園大学教授、広島ウィンドオーケストラの音楽監督、京都市響の常任客演指揮者を兼務している。出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣賞、東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門奨励賞など、受賞も数多い。

ほぼし
圧倒的な技術と迸る情熱
人気急上昇中のピアニスト

アリス＝紗良・オット

Piano
Alice Sara Ott



©Marie Staggat / DG

現在、世界において最も刺激的な音楽家の一人と目されている、ドイツ人と日本人の両親のもとに生まれたピアニスト。

これまでにマゼール指揮ミュンヘン・フィル、アシュケナーズ指揮フィルハーモニア管、V. ペトレンコ指揮オスロ・フィル、チョン・ミョンフン指揮フランス国立放送フィルなどと共演を重ね、快進撃を続けている。2008年にはドイツ・グラモフォンと専属契約を結び、数多くのアルバムをリリース。最近ではフランチェスコ・トリスターノとのデュオ演奏も高い人気を博している。また、14年1月からは「音楽の友」誌上でエッセイ「アリス＝紗良・オット～ピアニスト 世界を巡る」を連載している。今シーズンはシカゴ響とのデビューを予定している。

読響とは2007年に初共演。以来、7年ぶり2度目の共演となる。

◇9月3日 読響メトロポリタン・シリーズ

ボーダーレスで多才な活動
世界中で愛されるピアニスト

小川典子

Piano
Noriko Ogawa



©満田聡

第9回リーズ国際ピアノコンクール入賞を機に、英国と日本を拠点として活躍し、演奏はもとより国際コンクールでの審査、各国でのマスタークラスなど、多彩な活動を展開している。2014年には昨年に引き続きBBCプロムスに出演したほか、国際的な音楽祭への出演やリサイタル、海外オーケストラとの共演等が予定されている。

北欧最大のレーベルBISから30枚におよぶCDをリリースしており、中でもモーツァルトのアルバムは「レコード芸術」誌で特選盤に選出された。英・ギルドホール音楽院教授、東京音楽大学客員教授、ミューザ川崎シンフォニーホールアドバイザー。文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞、川崎市文化賞を受賞。

読響との初共演は1998年。以後、数多くの公演に出演している。

◇9月16日 サントリーホール名曲シリーズ

100年を超える音楽教育の歴史
伝統を受け継ぐ若人達の歌声

上野学園大学合唱団

Ueno Gakuen University Chorus

読響の首席客演指揮者、下野竜也が教授を務める上野学園大学で声楽を専攻する学生による合唱団（今回は声楽専門以外の学生も参加）。前田幸康教授が常任指揮者を務めている。

1958年に始まった大学の定期演奏会に女声合唱団として参加して以来、年2回の定期演奏会をはじめ、N響定期公演ほか各地の演奏会に出演。2007年には大学に男女共学制が施行され、混声合唱団として新しく出発した。今回は、混声合唱団としては初めてプロのオーケストラとの共演となる。

委嘱オラトリオ〈宇曾利〉（詩：石橋裕、作曲：黛敏郎）などの邦人作品をはじめ、ヴィヴァルディやラターの作品など、古楽から現代にいたる多彩な作品を「合唱」の授業を通して学び、発表している。

◇9月16日 サントリーホール名曲シリーズ

巨大な楽器を繊細に操る
パイプオルガンの第一人者

小林英之

Organ
Hideyuki Kobayashi



1955年京都生まれ。東京藝術大学音楽学部卒業、同大学院修了。ドイツ・フランクフルト音楽大学卒業。各地での独奏会のほか、アンサンブルへの参加も多く、オーケストラのオルガン・パート演奏でも高い評価を得ている。ソリストとしては神奈川フィル、オーケストラ・アンサンブル金沢、東京シティ・フィル、N響、新日本フィル、東京都響の定期演奏会に出演。また、東京芸術劇場をはじめ各地のホールでオルガン関連事業の企画を担当するほか、中学生、高校生あるいは一般愛好家を対象としたオルガンに関する啓発活動も積極的に行っている。

上野学園大学教授。東京芸術劇場オルガニスト。

ソリストとしては、今回が読響と初共演。

◇9月20日 東京芸術劇場マチネーシリーズ ◇9月21日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

読響を最後方から支える
首席ティンパニ奏者

岡田全弘

(読響・首席ティンパニ奏者)

Timpani
Masahiro Okada
(YNSO Principal Timpani)



©読響

読響の演奏を後方から支える首席ティンパニ奏者。

その多彩な音色は、多くの聴衆の心をつかんでいる。

東京藝術大学卒業、高橋美智子氏に師事。93年8月、読響に入団。97年から1年間ウィーンに留学し、ウィーン・フィルのティンパニ奏者、ローラント・アルトマン氏に師事した。

2013年7月、チョン・ミョンフン指揮アジア・フィルにティンパニ奏者として参加。14年2月には上野学園大学・同短期大学部ウィンド・アンサンブルの第1回定期演奏会にて、下野竜也教授の指揮のもと、テリヒエンのティンパニ協奏曲を演奏し、同年6月には上野学園創立110周年記念コンサート「ピアノと打楽器が会おうとき2×2」においてバルトークの〈2台のピアノと打楽器のためのソナタ〉、福島和夫の〈水輪〉、ドアティの〈ラウンジ・リザーズ〉(日本初演)を演奏した。

上野学園大学客員教授、武蔵野音楽大学非常勤講師として後進の指導にもあたっている。

◇9月20日 東京芸術劇場マチネーシリーズ ◇9月21日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

プログラムノート

PROGRAM NOTES

広瀬大介

ひろせ だいすけ・音楽学、音楽評論

第10回
読響メトロポリタン・シリーズ

9.3 〈水〉

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第1番 ハ長調 作品15

作曲:1794~95年、1800年(改訂版)/初演:1795年3月29日、ウィーン、ホーフブルク劇場(独奏:ベートーヴェン)/演奏時間:約36分

協奏曲の歴史に新たなページを加えた、若きベートーヴェンの野心作

この曲には「第1番」のタイトルが付けられているが、実際に作曲されたのは「第2番」よりも後である。故郷ボンからウィーンに到着した2年後、1794年に着手され、翌年には一応の完成を見た。1795年3月29日、ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン(1770~1827)はウィーンでこの自慢の曲をみづから演奏し、同地の音楽界に颯爽と登場する。1801年3月の出版の際にも、わざわざ「大協奏曲」と名付けるほどの意気込みを見せた(対照的に、同年12月に出版された第2番については作曲家自身が出版社に「自身の最良の作品ではない」と打ち明けている)。オーケストラ編成でも、第2番では欠落していたクラリネットとトランペット、ティンパニが加えられた。

第1楽章では、第2番に比べて曲その

ものの規模が拡大し、冒頭で提示される二つの主題の調性関係もそれまでの慣習を破っている(ハ長調と変ホ長調)。作曲家自身のカデンツァは3種類、遺されているが、いずれも当時本人が所有していたピアノでは演奏できない音域が含まれており、その音域を演奏できるピアノを入手した出版年以降に作られたのではと考えられている。簡素な**第2楽章**でも、慣習を破る変イ長調が選ばれ、独奏パートの技巧性は第2番よりもさらに難しく、華やかになる。とくに**第3楽章** ロンドでは、絶え間なく続く走句が両手で交互に演奏されながら、空いた手で旋律が演奏される。難しい演奏技巧と見た目の華やかさを同居させようとしたところに、ベートーヴェンのピアノに対する考えが透けて見える。

楽器編成/フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

リヒャルト・シュトラウス アルプス交響曲 作品64

作曲:1914~15年/初演:1915年10月28日、ベルリン・フィルハーモニーホール (R.シュトラウス指揮)/演奏時間:約47分

「自然賛歌」の影に見え隠れする、作曲家が抱えたニヒリズムの闇

晩年のリヒャルト・シュトラウス(1864~1949)は、自身の伝記を編纂した音楽学者ヴィリ・シューに対し、こう語ったという。「私は自作の〈アルプス交響曲〉を『アンチ・キリスト』と名付けたいと思っていた。すなわち、永遠かつ壮大な自然への礼賛であるこの作品を通じて、慣習の束縛を浄化し、解放するために」と。

ここで言う『アンチ・キリスト』が、哲学者フリードリヒ・ニーチェが手がけた同名の書を指すことにほぼ疑いはない。シュトラウスは無神論者でもあったが、むしろニーチェ信奉者だったという方がその実態に近い。自己の音楽的才能に絶対的な自信を持っていたシュトラウスは、才能を持たぬ人間が自分の足を引っ張り、貶めようとする姿をいやというほど目の当たりにしてきた。ニーチェは、強者を貶め、弱者を助けるキリスト教の教義を「畜群思想」と名付け、人間の様々な「欲」を奪う、本来の人間の在り方に反する思想として厳しく指弾し、自然の偉大さを説いた。この考え方に共感を抱いたシュトラウスは、1895年にその著作をもとに交響詩〈ツァラトゥストラはかく語りき〉を作曲する。この曲では、作品の物語内容を音で描いた従来の交響

詩とは異なり、自然と人間の相克、そして人間のみじめな敗北といった、作曲家自身がこの作品から読み取った主題が中心に据えられている。自然をハ調、人間をロ調に託し、半音同士でぶつかり合う調性による不協和音のきしみは、音楽的な緊張感を生み出す原動力となった。

1898年に〈英雄の生涯〉を作曲した後のシュトラウスは、オペラの制作へと完全に軸足を移してしまう。20世紀に入ってから作曲された純粋な大管弦楽作品は、1904年の〈家庭交響曲〉、1915年に初演された〈アルプス交響曲〉のみとなる。1902年に先述の『アンチ・キリスト』、そして『芸術家の悲劇』(タイトルから察せられるように、この作品にも作曲家が他の作品で見せた自画像的題材を盛り込もうとしていたことは注目すべきだろう)という名前で4楽章から成る交響曲のスケッチが作られはするものの、1911年からはこの構想を引き継ぐ形で、アルプスを描写する「自然賛歌」へと内容は微妙に変化しながら、スケッチが進められた。多忙を極めるオペラの作曲と指揮活動の合間を縫うように作曲されたこの作品は、見た目こそ一人の登山者が、壮大な自然に触れ、登山に挑む一日

を描いた交響詩となっ**て**はいるが、その背後には自然の力の前に己の無力を悟る、といったニーチェ由来のモチーフが隠されている。この曲の主人公とおぼしき登山者は、あくまで壮大な自然を前に、^{ひざまず} ^{ゆる} 跪き、赦しを請う姿で描かれていることから、最初期の構想が各所に残っていることが察せられよう。

楽曲形式にもさまざまな工夫が凝らされている。冒頭の**“夜”**では、変ロ短調の音階が順に下降しながら、その構成音が弦楽器ですべて鳴り続け、夜の深い闇を表す。爆発的な大管弦楽による**“日の出”**の描写にも、あまりにも有名になってしまった〈ツァラトゥストラ〉冒頭の音楽のイメージがこだまする。その後、チェロとコントラバス、そしてハーブ(!)で演奏される、力強い大地を踏みしめながら登っていくさまが描かれた**“登り道”**のモチーフ。「非常に生き生きと、エネルギーに」と題されたこのモチーフは、常に曲を下支えする主要な主題として機能する。**“森への立ち入り”**でも、**“滝”**を歩んでいても、さらには**“林で道に迷う”**時も、このモチーフはあちこちで形を変えつつ、技巧の限りをつくした管弦楽法で自然の様子が音画的に描写される。

さらに、嵐に遭って下山する際は、この登山音型が逆行形で現れるのが目を惹く。自然の偉大な力を前にした登山者がうちひしがれている姿(やはりこのモチーフの変形)で曲が閉じられるのも興味深い。

これまで曲全体は「夜・日の出」「登山」「頂上」「下山」の四つの部分(楽章)から成る「交響曲」と解釈されるのが一般的だった。だがこの作品はむしろ、登山者が頂上にたどり着いた部分を中心とした(かなり非対称ではあるが)鏡像型をしている、と考えるべきではないか。二つの主題から新しい展開を生み出し、最終的に両者を止揚しようとするソナタ形式とは異なり、最後には最初と同じ主題が回歸し、同じ変ロ短調に戻り、発展しないまま終わってしまう。従来の交響曲の形式とは一線を画すこの曲に、「交響曲」という名前を与えるという行為そのものも、シュトラウスの皮肉の表れともとれる。もしかすると、「壮大な効果音楽」や「羊の鳴き声の擬音」を純粋に愉しむ我々聴き手の側も、「慣習の束縛を浄化し、解放」されることのない人間として擲^や擧^ゆされているのではないか。シュトラウスが抱えていたニーチェ由来のニヒリズムの闇は、我々が想像する以上に深い。

楽器編成/フルート4(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、ヘッケルフォン、クラリネット3(バスクラリネット持替)、エスクラリネット、ファゴット4(コントラファゴット持替)、ホルン8(ワーグナーチューバ持替)、トランペット4、トロンボーン4、チューバ2、ティンパニ2、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、タムタム、カウベル、ウインドマシーン、サンダーシート、グロッケンシュピール)、ハーブ2、チェレスタ、オルガン、バンダ(ホルン12、トランペット2、トロンボーン2)、弦五部

第540回
定期演奏会

9.9 〈火〉

ハイドン

交響曲 第9番

ハ長調 Hob.I-9

作曲：1762年初頭／初演：不明／演奏時間：約12分

フィナーレがない？ 若き日のハイドンによる異色の交響曲

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）は1761年5月に、ハンガリーの裕福な貴族エステルハージ侯爵の宮廷に副楽長として職を得て、10人余りの楽士からなる楽団を任された。以後彼は、1750年代後半より手がけていた交響曲の創作に本腰を入れ、さまざまに創意あふれる作品をエステルハージ家のために作曲することになる。1762年に作曲された第9番ハ長調もそのひとつで、同家の宮廷楽団によって初演されたと思われる。

ハイドンは一般に「交響曲の父」といわれる。しかし、交響曲と呼ばれる多楽章形式の楽曲は彼以前よりヨーロッパ各地で作られており、それらはイタリア風序曲に起源を持つ急一緩一急の3楽章構成や、中間にテンポの遅い楽章とメヌエ

ット舞曲を持つ4楽章構成によることが多かった。初期のハイドンの交響曲はそれら先行作品に追随する楽章構成を主に採用したが、第9番は例外的に、急速なテンポによる終楽章を省略し、メヌエットで終わるという3楽章構成をとっている。

第1楽章 アレグロ・モルト 急速な第1主題と、分散和音的な動きを含む第2主題による、簡潔なソナタ形式をとる。

第2楽章 アンダンテ 特徴的な3連符や付点リズムを伴う旋律が歌われる。

第3楽章 メヌエット～トリオ 簡潔で平明であると同時に、トリオでは管楽器群を主体とし、オーボエ独奏を前面に出すなど、個性的な明るさと優美さを持つメヌエット舞曲で、全曲の締めくくりにふさわしい華やぎを感じさせる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、ファゴット、ホルン2、チェンバロ、弦五部

ブルックナー

交響曲 第9番

ニ短調 WAB. 109

作曲：1887年8月～1896年10月（未完）／初演：1903年2月11日、ウィーン（第三者の変更を含む初版による）、1932年4月2日、ミュンヘン（原典版）／演奏時間：約63分

作曲者の死によって未完に終わった、巨大な構想に基づく傑作交響曲

アントン・ブルックナー（1824～96）は番号付きの9曲と習作の2曲、あわせて11曲の交響曲を遺した。しかし実際にはそれらの大半において、完成後もおびただしい改訂を行っているため、労力としてはさらに数曲分を交響曲に費やしたといえることができる。これは自作が演奏・出版される機会を得ると、周囲の者に助言や意見を求め、それらをよく聞いた挙げ句に楽譜に採り入れてみたり、あるいは全面改稿を試みたりしたためで、いくつかの楽曲には数種の異稿が作られたほか、出版に際しては第三者の積極的な改訂が、作曲者の承認の下に加えられている。

この改訂癖のあおりを受けたのが、最後の作品となった交響曲第9番ニ短調である。ブルックナーは同曲を1887年8月、交響曲第8番の第1稿を脱稿してわずか数日後に書き始めたものの、まもなくその第8番をはじめ、以前書き上げた交響曲やミサ曲数曲の改訂に着手したため、長い中断を余儀なくされ、本格的に作曲を再開できたのは4年後の1891年になってからであった。その後彼は、1894年11月に第3楽章までを書き終えることができたものの、70歳を迎えた

その身体は既に衰えが激しく、ようやく第4楽章フィナーレに着手できたのは半年以上が過ぎた翌年5月のことであり、以後も筆は思うように進まず、完成に至らないままに他界することになる。

未完に終わった第4楽章については、結尾部分を除いて詳細なスケッチが多数現存しており、その中には完全な形の管弦楽総譜までこぎつけた部分もあって、それらを基に作曲者の構想した音楽を復元する試みがこれまでにいくつか成されている。また作曲作業のある時点で完成を断念したブルックナーは、結尾部の代わりに自らの声楽曲〈テ・デウム〉を置くことを構想し、そのための移行部の作曲を試みていて、そのスケッチも残されている。しかし、彼自らが完成させた第1楽章から第3楽章までの音楽がみせる規模の大きさ、完成度の高さには、そのような暫定的な措置と相容れないものがあり、最初の楽譜出版以来、現在に至るまで、これら3楽章のみを全曲として演奏するのが通例である。

第1楽章 荘厳に、神秘的に 長大であるだけでなく、構造においても巨大な、三つの主題を持つソナタ形式によっている。なかでも第1主題は一つの旋律では

なく、冒頭の最弱奏のトレモロに乗って奏されるホルンの動機に始まって、以後最初の最強奏を形成する、3連符の特徴的な動機に至るまでの、すべての旋律的な素材から成ると考えられる。その後、ほぼ弦合奏のみで歌われる歌謡的な第2主題、オーボエとホルンの応答が導き出す第3主題を経て、展開部ではそれらの主題が密に関連づけられ、いくつもの高揚を積み重ねながら音楽が進められていく。第1主題の素材に基づく長大なクライマックスの後、再現部は、ほぼ提示部のまま再現される第2主題によって始まり、第3主題の再現を経て、第1主題の動機に基づく結尾を迎え、印象的な二重付点リズムを繰り返す金管楽器群とともに、最強奏のうちに終わる。

第2楽章 スケルツォ 動きを持って、生き活きと 主部とトリオ、そして主部の反復と、通常のブルックナーの交響曲におけるスケルツォと同じ構成をとりながら、不安定な和声や転調が好まれ、以前よりも拡大された印象を与える。主部は長大な序奏を持ち、その中に登場するリズム・パターンと音形とが主部の主要主題となって、やがて荒々しく立ちあらわれる。中間部では一転して軽快な主題が木管楽器の間で交わされるものの、長くは続かず主要主題が回帰する。

楽器編成／フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン8（ワーグナーチューバ持替）、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

トリオはヴァイオリンによって奏される軽やかな第1主題と、やはり弦楽器を中心とした歌謡的な第2主題とによる簡潔なソナタ形式をとる。ほぼ提示部通りの再現部の後、スケルツォ主部が反復されて終わる。

第3楽章 アダージョ 緩やかに、荘厳に ここではホルン奏者の半数がワーグナーチューバに持ち替えて、重要な役割を演じている。

第3楽章は第1楽章のような拡大されたソナタ形式と考えることができる。冒頭の大きな音程跳躍に始まる印象的な旋律からトランペットの短く鋭い動機の反復までが第1主題部、ヴァイオリンの低い音域で歌われる旋律を中心とするのが第2主題部である。それぞれが提示された後、冒頭の回帰とともに展開部に移行し、息の長く、大きな高揚が描かれる。再現部は第2主題から始められるものの、大きな変容を経て断片的であり、いくつかの動機はもはや戻って来ない。最後にブルックナー自身の交響曲第8番第3楽章の冒頭と、第7番第1楽章の第1主題が回想されて、静謐な雰囲気せいひつのうちに曲が閉じられる。

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

片桐卓也

かたぎり たくや・音楽ライター

第574回
サントリーホール名曲シリーズ

9.16 〈火〉

松村禎三 ゲッセマネの夜に

作曲：2002年／初演：2002年9月8日、金沢／演奏時間：約14分

作曲者にとって最後の管弦楽曲となった作品には絵画の影響も

ゲッセマネとは新約聖書に登場する地名である。ゲッセマネの園という表現をすることもある。イエス・キリストが弟子たちと共に最後の晩餐^{ばんさん}を食し、その後、神に祈りを捧げた場所である。またイスカリオテのユダの裏切りによってイエスが捕らえられた場所でもある。イエスを裏切ったユダは、イエスを捕らえに來た役人たちにイエスが誰であるかを分からせるために、イエスにキスをするのだが、ちょうどその情景を描いた絵画がある。ジョットの「ユダの接吻^{せつぶん}」。イタリア、パドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂の内陣装飾画として描かれたフレスコ画だ。その構図は、中央で対峙^{たいじ}するイエスとユダの周りで、さまざまな棒を持った男たちが争うという動的なものである。

松村禎三（1929～2007）はこの〈ゲッセマネの夜に〉という作品を書く時に、ジョットのこの絵を傍らに置いていたという。松村は京都出身で、伊福部昭などに師事した。代表作には遠藤周作の原作によるオペラ〈沈黙〉、二つの交響曲などがある。〈ゲッセマネの夜に〉は松村にとって最後の管弦楽曲となった。2002年にオーケストラ・アンサンブル金沢のコンポーザー・イン・レジデンスとして活動している時期に委嘱されて書いた。その後、二度改訂されている。特に2005年の最後の改訂では、トロンボーンを加えた。通常のオーケストラより編成の小さいオーケストラ・アンサンブル金沢のための作品だが、緻密な音楽作りによるドラマティックな世界が展開する。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、打楽器（サスペンデッド・シンバル、タムタム、ヴィブラフォン、シロフォン、マリンバ、チューブラーベル）、弦五部

モーツァルト ピアノ協奏曲 第24番 ハ短調 K. 491

作曲:1786年／初演:1786年3月24日、ウィーン／演奏時間:約31分

独自の感性を惜しみなく発揮した短調の傑作

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）が書いた第27番までのピアノ協奏曲のなかで、短調を主調とする作品は二つしかない。第20番ニ短調K. 466と第24番ハ短調K. 491である。ウィーンで活躍を始めた時期のモーツァルトにとって、自作の協奏曲を披露する予約演奏会は最も重要な仕事のひとつだった。そして、この第24番は予約演奏会のための最後の協奏曲となったのである。

ご存知のように、モーツァルトはザルツブルク大司教と決裂して、1781年5月以降は、ウィーンに移り住んでいたウーバー家にやっかいになりながら、自由な作曲活動を行うようになった。それは当時としてはかなり異例のことだった。宮廷でなんらかの職を得るか、あるいは教会に所属して活動するか、それが作曲家としての生きる道だった時代に、まったく自分の作品の魅力だけで聴衆を惹き付けながら生きていくというのは大変だったのだ。しかし、モーツァルトはあえてそれに挑戦し、一時期はウィーンちやうじの寵児となる。その主な活躍の舞台が

予約演奏会、そしてピアノ協奏曲というジャンルだった。もちろんモーツァルト自身がピアノを弾き、おそらく時には即興的な演奏も行っていただろう。

ただし、その予約演奏会も次第に人が集まらなくなり、この協奏曲が初演された1786年3月が最後となる。モーツァルトの作品がウィーンの聴衆の趣味を超えた領域まで進化して、その斬新さについていけなくなったからだとも言われているが、都市での流行とは現代でもそういうものだ。

さて、この第24番は第1楽章から、変奏曲形式による第3楽章まで、いつものモーツァルトのピアノ協奏曲のスタイル（3楽章形式）を踏みながらも、あえて言えば遊びのない緊張感に支配された音楽になっていると言えるだろう。**第1楽章**の緊密な音のつながりは、後輩ベートーヴェンをも思わせるもの。**第2楽章**は晩年のモーツァルトに繋がるような天国的な平安が感じられる。しかし**第3楽章**フィナーレは、再び暗い情熱が支配する音楽となる。

楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

J. S. バッハ（ストコフスキー編） ゲッセマネのわが主よ BWV487

作曲:不明／初演:不明／演奏時間:約6分

ゲッセマネの園でのイエスの苦悩を描いた歌曲を弦楽合奏に編曲

指揮者のレオポルド・ストコフスキー（1882～1977）は20世紀の初頭からアメリカで活躍し、特にフィラデルフィア管弦楽団と長く深い関係を持っていた。1912年に常任指揮者となり、それは1940年まで続いた。録音にも初期から積極的に取り組み、映画「オーケストラの少女」（1937年）、ディズニーのアニメーションの傑作「ファンタジア」（1940年）にも登場するなど、非常に多彩な活躍をした。ストコフスキーが初演した20世紀の傑作にはラフマニノフの〈パガニーニの主題による狂詩曲〉などがある。また、ムソルグスキー作曲〈展覧会の絵〉の編曲も行っている。

そしてストコフスキーといえば、J. S. バッハ（1685～1750）のさまざまな作品をオーケストラ用に編曲したことでも知られている。特に有名なものはオルガン曲〈トッカータとフーガ ニ短調〉だろう。批評家は批判的だったようだが、聴衆からは好評だったという。

さて、本日演奏される〈ゲッセマネのわが主よ〉は、弦楽合奏による静かで、かつ精神的な深さを感じさせる編曲とな

っている。この原曲は、バッハが1736年に出版した〈シェメッリ賛美歌集〉（BWV439～507）の中の1曲である。シェメッリ（1676～1762）はライプツィヒ近郊のツァイツ（バッハの後妻アナ・マグダレーナの出生地）という街のカントル（キリスト教音楽の指導者。バッハもそうだった）をしていた作曲家で、それまでの賛美歌集よりも優れた作品集を編むために、バッハに協力を求め、この曲集が出版された。ここには954曲の宗教的歌曲が収録されている。この中でバッハが書いた作品の数は少ないとされ、現在の研究ではわずか3曲だけがバッハの真作とされている。

この〈ゲッセマネのわが主よ〉だが、原題は〈わがイエスよ、どれほどの魂の痛みを〉というもので、F. シュルツェの作詞、定旋律の作者は不詳である。内容的にはゲッセマネの園で苦悩の内に祈るイエスへの共感を静かに歌う。バッハは〈マタイ受難曲〉でゲッセマネの園で祈るイエスの苦悩を描いているが、その部分にも通じる感情がここにも流れていると感じられる。

楽器編成／弦五部

※指揮者・下野竜也氏の意向により、バッハとフサの両作品は続けて演奏されます。

カレル・フサ この地球を神と崇める

作曲：1972年／初演：1973年4月12日（管弦楽・合唱版）／演奏時間：約26分

地球上の災いを憂う声。それを音楽で表した管弦楽曲

チェコ出身の作曲家カレル・フサ（1921～）はどちらかといえば吹奏楽のファン、あるいは経験者にとって親しい名前かもしれない。本日演奏される〈この地球を神と崇める〉と並んで有名なフサの作品〈プラハ1968年のための音楽〉も、吹奏楽でよく演奏される作品だ。

フサはプラハで学んだ後、パリでオネゲルとブーランジェに作曲を学び、クリュイタンスに指揮を学んだ。その後、ヨーロッパ各地の作曲コンクールで作品が注目され、1956年にはアメリカのコーネル大学（ニューヨーク州イサカ）の作曲家教授として招聘される。そしてアメリカで書いた作品がピュリッツァー賞（1969年）を獲得するなど、高い評価を受けるようになった。

〈プラハ1968年のための音楽〉もバンド（吹奏楽）のために書かれた作品だったが、〈この地球を神と崇める〉もまず1970年に吹奏楽のために書かれ、そして1972年にオーケストラと合唱のための版が作られた。今回はそのオーケストラ&合唱版の日本初演となる。英語の原

題は“Apotheosis of this Earth”。“Apotheosis”は神格化という意味で、**第1楽章**のタイトルでもある。

フサはスコアの冒頭にこの作品に込めた想いを書き連ねた。「この地球上で絶え間なく続く、殺戮、飢餓、生命ある種の絶滅、巨大な森林火災」など、地球環境に対する人間のなす災いを憂う。そして、管弦楽版に加えられた合唱は、歌詞を歌うというより、「アーメン」「助けてください」「殺せ」「なぜ?」「この美しい地球」という短い言葉を、さまざまなテクニクによって歌うのだ。その合唱の音色はオーケストラとからみ合って、複雑な音響世界を作っている。

第2楽章 “Tragedy of Destruction”はそのタイトル通りに、人間の暴力性を描いている。**第3楽章 “Postscript”**はまさに「その後」の世界を描く。フサのスコアには、合唱の唱法がこまかく指定されており、4分音なども使われている。合唱としてはかなり難しいテクニクなので、オーケストラのみならず、合唱にも注目してほしい。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット4（バスクラリネット持替）、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、シズル・シンバル、フィールドドラム、トムトム、グロッケンシュピール、チューブラーベル、ヴィブラフォン、シロフォン、マリンバ、鐘、ゴング、リラ）、弦五部、合唱

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

飯尾洋一

いいお よういち・音楽ライター

第169回
東京芸術劇場マチネーシリーズ

9.20 〈土〉

第74回
みなとみらいホリデー名曲シリーズ

9.21 〈日〉

J. S. バッハ（ストコフスキー編）

トッカータとフーガ BWV565

作曲：不明／初演（ストコフスキー編曲版）：1926年2月8日、フィラデルフィア／演奏時間：約9分

バッハの名曲を大オーケストラで。ストコフスキーのトレードマーク

「変則オルガン・プロ」とでもいうべき本日のプログラムは、往年の名指揮者レオポルド・ストコフスキー（1882～1977）によるヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1685～1750）のオルガン曲〈トッカータとフーガ〉のオーケストラ編曲で幕を開ける。プーランクとサン＝サーンスのオルガン作品の前に、オルガンが登場しないオルガン曲が演奏されるという粋な趣向になっている。

ストコフスキーといえば20世紀アメリカを代表する個性派指揮者であるが、生まれはロンドン。幼少よりヴァイオリン、ピアノ、オルガンを学び、若き日にはピカデリーの聖ジェイムズ教会のオルガニストに就任し、渡米後はニューヨークの聖バーソロミュー教会のオルガニストを

務めている。オルガンとの縁は深い。

その後、指揮者としての道を歩んだストコフスキーは、1912年から1940年までの長きにわたって、フィラデルフィア管弦楽団を率いて、この楽団をトップレベルにまで育てあげた。きわめて多数の同時代の音楽を世界初演あるいは米国初演する一方、バッハらの作品をオーケストラ用に編曲して、聴衆に新鮮で驚きに満ちた体験をもたらした。

なかでもこの〈トッカータとフーガ〉は評判を呼び、録音でもベストセラーとなっている。管弦楽の豊かな音のパレットを縦横無尽に操った華麗な編曲が、荘厳な原曲とは異なる表情を生み出しており、音の魔術師ストコフスキーならではの再創造と呼ぶにふさわしい。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、タムタム）、ハープ2、チェレスタ、弦五部

プーランク オルガン、弦楽とティンパニのための協奏曲 ト短調

作曲：1936年／初演：1939年6月21日、パリ／演奏時間：約22分

聖俗を自在に行き来するプーランクの面目躍如たる快作

1934年、エドモン・ド・ポリニャック公妃は「室内オーケストラと易しいオルガン・パートのある作品」を作曲家のジャン・フランセに委嘱した。フランセがこれを断ったため、フランシス・プーランク（1899～1963）が依頼を引き受けて、この〈オルガン、弦楽とティンパニのための協奏曲〉という異色の編成の作品が生み出されることとなった。

オルガンと弦楽とティンパニのための協奏曲、つまり管楽器抜きの協奏曲という編成には意表をつかれるが、発音機構からいえばオルガンは巨大管楽器だから、これで管・弦・打楽器が一通りそろっていると見ることもできるだろう。プーランクはこの編成について、「オルガン協奏曲は宗教曲ではないが、教会でも演奏可能な編成にした」という。

作曲中のプーランクは「(すでに同じポリニャック公妃のために書いた)2台のピアノのための協奏曲のような陽気なプーランクではなく、修道院に向かうプーランク」による作品だと述べて、その宗教的な性格を示唆している。しかし楽

想は多彩で、ときに軽妙洒脱^{しゃだつ}でときに敬虔^{けいけん}真摯^{しんし}な作曲家の二面性がよく表れており、聖俗を自在に行き来するプーランクの面目躍如といった快作に仕上がっている。

曲は切れ目のない七つの部分からなり、三つの楽章から構成されるとみなすことができる。**第1楽章**はアンダンテ～アレグロ・ジョコーソ。荘重なオルガン独奏で開始されるアンダンテに、リズムカルなアレグロ・ジョコーソが続く。

第2楽章はアンダンテ・モデラート。抒情的で幻想的な緩徐楽章。次第に緊迫感を高め、一瞬敬虔な祈りの表情を見せたかと思うと、次の楽章によって唐突に音楽は断ち切られる。

第3楽章はテンポ・アレグロ～モルト・アジタート～とても穏やかに、レント～アレグロ～ラルゴ。第1楽章の主題を回帰させながら、目まぐるしく表情を交錯させる。チャイコフスキーの交響曲第6番〈悲愴〉終楽章を思わせる一節もさしはさまれ、頂点を築いた後に静謐^{せいひつ}で厳粛な終結部にたどりつく。

楽器編成／弦五部、独奏ティンパニ、独奏オルガン

サン＝サーンス 交響曲 第3番 ハ短調 作品78 〈オルガン付き〉

作曲：1886年／初演：1886年5月19日、ロンドン／演奏時間：約36分

オルガンの響きが管弦楽と一体となって生み出す壮麗な交響曲

1886年、カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）は前作から実に27年を経て、新たな交響曲の作曲に挑んだ。作曲を委嘱したのはロンドン・フィルハーモニック協会。初演の会場となるセント・ジェームズ・ホールにはオルガンがあり、オルガニストでもあったサン＝サーンスはこのオルガンを演奏した経験があった。管弦楽にオルガン、さらにはピアノを加えた独自の楽器編成が採用され、豊麗で精彩に富んだ響きがオーケストラから引き出されている。作曲者は「自分の与える限りのすべてがこの作品に込められている……だからこのような作品を二度と書くことはないだろう」と作品への自負を表明している。

作品は二つの楽章からなり、さらにそれぞれが前後半の2部から構成される。

第1楽章前半はアダージョ～アレグロ・モデラート。ワーグナーの〈トリスタンとイゾルデ〉前奏曲を連想させるような官能的な序奏で開始され、続く急速な主部で弦楽器のさざめくような主題があらわれる。主題の冒頭はグレゴリオ聖歌の

〈怒りの日〉からの引用になっている。

第1楽章後半はポーコ・アダージョ。緩徐楽章に相当する部分で、オルガンが弦楽器とともに切々とした楽想を奏でる。

第2楽章前半はアレグロ・モデラート～プレスト～アレグロ・モデラート～プレスト。鋭くエネルギーに満ちた主題によるスケルツォ風の音楽。

第2楽章後半はマエストーソ～アレグロ。荘厳なオルガンの強奏によって導かれるフィナーレ。4手ピアノも加わり、第1楽章の主題を変形して回帰させながら、壮麗なクライマックスを築く。

全体として見れば古典的な4楽章構成が保たれているが、サン＝サーンスは前半2楽章と後半2楽章をそれぞれ一つの楽章とすることで「際限のない再現部や繰り返しを避ける」ことを意図した。

作品からは「苦悩から勝利へ」「ハ短調からハ長調へ」というベートーヴェン流の交響曲の図式が浮かび上がる。ロンドン初演に続くパリ初演では、作品に感銘を受けたグノーが、作曲者を「フランスのベートーヴェン」と讃えたという。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、4手ピアノ、オルガン、弦五部